



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有島武郎の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	中村, 建
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15981号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92257
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takeru_Nakamura_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 中 村 建

学位論文題名

有 島 武 郎 の 研 究

・本論文の観点と方法

本論文は、有島武郎の小説・戯曲・評論を対象として、それらにおける恋愛の表現を分析し、その文芸様式と恋愛がどのように関係するのかを解明して、その文芸総体の再評価を行うことを主な観点とする。長編評論『惜みなく愛は奪ふ』を書いた有島において、愛は通常の意味を超え、人間の生命力の根幹に位置し、その活動の基盤となる力と見なされていた。物語におけるその主な具現となる恋愛についても、必然的にこの観点から究明しなければならない。

しかし従来、有島と恋愛については、作者自身の実人生から論じた伝記的な研究が中心であり、恋愛を題材とした作品に対しては、観念先行とか不自然であるなどの批判的な評価がなされることが多かった。本論文は、有島が活動した明治期末から大正時代における同時代の恋愛論の流行も参照しつつ、申請者が有島の提唱したものと見なす「恋愛の多角性」の概念を手掛かりとして、従来において批判された部分をも含め、その表現を有島独自の文芸様式の重要な側面として評価することを試みる。

すなわち本論文の方法は、「恋愛の多角性」概念を中心として、有島の評論類における言説を基礎として、有島の文芸作品の解釈を展開する。特に、これまで小説に比べて深く追究されることの少なかった戯曲作品についても分析の対象とし、小説・評論と併せて総合的に評価を行った。また、該博な教養を背景として創作を行った有島の資質をも踏まえ、日本古典を含む先行文芸の継承や、海外の文芸との比較文学的な関係にも留意し、中でも戯曲研究においては、直接題材を仰いだ原作からのアダプテーションの局面から、その作劇法の意義についても論及する。さらに、小説の分析においては、ナラトロジーの観点から、多元的焦点化による構造論を軸として詳細な検討を加えている。

・本論文の内容

本論文は、序論・結論の外、全三部九章から成る。序論では、これまでの有島武郎研究史を概観し、研究の現状と課題を踏まえた上で、本論文の目的・方法・構成を示した。

第一部では、有島が評論「自己の要求」において提唱した「恋愛の多角性」を中心に考察し、さらに有島文芸における個人と他者との関係、また小説叙述における多元的焦点化の手法についても論じた。第一章では、大正時代後期に流行した恋愛論における有島武郎の位置づけを明らかにした。厨川白村や土田杏村ら他の論者の恋愛論では欠如しがちであった、恋愛において客体となる側面を有島は考慮に入れており、そのような「恋愛の多角性」の問題が、有島の小説や戯曲において描かれたことを論じ、本論全体の見取り図を示した。第二章では、有島が主に芸術論において主張したものと認められる、個人が融合する対象としての観念的自然という概念を念頭に置いて、『或る女』前編に見られる夢想的な場面の分析を試みた。特に、主人公早月葉子の経験の個別性と、個人と他者との間における不透明な関係性について論じている。作中で描かれる海から聞こえてくる夢想的な声に象徴されるような、完全に自己を失った存在への恐怖感から、葉子は複数の男性の中から、倉地三吉という一人の男性を選ぶことになったと解釈し、そこに多角的な恋愛の限界を認めている。第三章では、これまで正面から論じられることの少なかった短編小説「凱旋」を扱っている。同時代の軍馬を描いた作品や有島と軍人との関わりを基礎に、引退した軍馬「凱旋」と老将軍らの物語に旧軍隊の売買春との関わりを風刺する要素を見出し、この小説の反軍性を明らかにした。またこの小説の結末部では、登場人物のそれぞれに対して焦点化が

行われている。このような多元的焦点化の手法を、社会の様々な位相にある人々を多面的に描くために導入されたものと見なし、後にその手法が全面化された長編小説『星座』に繋がるとして評価している。

第二部「有島武郎の恋愛を題材とした小説」では、有島の主要な小説群を、「恋愛の多角性」の観点を中心として再評価することを目指した。第四章では、往復書簡体小説『宣言』を取り上げ、作品を構成する書簡に、ホフマンスタールの『薔薇の騎士』やマーテルリンクの『アグラヴェーンとセリセット』など、西欧の恋愛物語など多くのテキストが引用・参照されることにより、真実の恋愛に「覚醒」したとする運命の物語が事後的に作られる側面のあることを論じた。また、書簡にド・フリースの突然変異説が引用されていることに注目し、同説が三者関係の変異のみならず恋愛そのものの不確かさを示唆する機能を有していることを明らかにした。第五章では、今日まで評価の分かれる問題作『迷路』を扱い、従来批判されてきた人妻との恋愛事件をめぐる主人公Aの混迷した内面（精神）が、決して観念先行ではなく彼の身体と密接に関連していることを分析した。その上で『或る女』の葉子との関連性を指摘し、Aの内面の混乱を混乱のままに呈示することによって、恋愛の不確かさや不随意性を表現する小説であることを論じた。第六章では、未完の長編小説『星座』を取り上げている。農学校の白官舎の学生たちと、その中で少女おぬい（おぬい）の家庭教師を務める学生たちとの関係を中心に分析し、主人公格の人物園のおぬいへの求婚問題に見られる、全体性と隔絶のどちらにも回収されないような両義的な関係が、多元的焦点化を駆使した叙述によって造形された作品として評価した。

第三部「有島武郎の恋愛を題材とした戯曲」では、戯曲においても小説と同様に、「恋愛の多角性」の問題が響いていることを明らかにし、加えて有島の作劇法についても論じた。第七章では、「死と其前後」を取り上げる。主人公夫婦の「愛の勝利」という同時代の解釈には、その背景に当時の日本におけるマーテルリンクの戯曲『アグラヴェーンとセリセット』の神秘主義的な受容があったことを論じた。また、本作が一方では夫婦愛の勝利を描きつつ、他方では愛の不可能性をも露呈するものであったとその両義性を指摘した。第八章では、「ドモ又の死」について、原作となったトウェインおよび近松門左衛門の作品と比較を踏まえ、商業主義の時代における芸術家への評価のあり方を諷刺したものとして分析した。最も見込みがないと思われた画家・ドモ又を、モデルの女性・とも子が夫として選ぶという物語の背後に、それを裏切るようなノイズの介在を指摘し、単純に調和的な収斂に向かうテキストではないことを論じている。第九章では、『或る女』の自己アダプテーションである有島晩年の作品「断橋」を対象として検討した。この戯曲には、『或る女』がモデルとした国木田独歩の作品も一部組み込まれている。これらおよび有島自身の原作と比較した結果、本作では枯淡・空虚な様相が強まっていることを、他者との断絶という晩年の有島の認識も踏まえて検証し、他方では、作中に現れる橋渡しという設定には、他者との接続の可能性も示されていることを明らかにした。このような断絶しつつ接続するというあり方を、アダプテーションによる作劇という有島の戯曲においてしばしば用いられる手法として確認した。

結論においては、本論の成果を確認した上で、「恋愛の多角性」を始めとする不確実な恋愛が、物語を単純な収斂に向かわせない過剰性を帯びる点を再度指摘し、これが有島の文芸様式と緊密に繋がる要素であるとまとめた。加えて、本論文の範囲では追究できなかった他の有島の作品や、関連する他の作家の恋愛論および文芸作品を論じることを今後の課題として結んでいる。